

原子爆弾により白血病に侵されながらも世界に平和を訴え続けた永井隆博士の精神を受け継ぎ、「愛」と「平和」をテーマとして、島根県雲南市が主催する平和作文コンクール「第31回永井隆平和賞」。全国1064点の応募の中から、小学生高学年の部で糸満南小学校の上原諒さんが最優秀賞、中学生の部で高嶺中学校の山城万奈美さんが佳作に選ばれました。上原さんは「最優秀賞を受賞することができて嬉しい」と、山城さんは「受賞できると思わなかったので驚きました」と入賞の感想を話してくれました。今回は、入賞した2人の作文を紹介します。

遺骨と私たち

糸満南小学校4年

上原 諒さん



私は、今年の一月まで犬をかっていました。名前はルン。めったにほえないやさしい犬でした。十八才だったから、人間にたとえたら八十八才。ルンは私やお姉ちゃんが生まれるよりも先にうちにいたので、お兄ちゃんのようなそんなさいの大切な家族でした。亡くなったルンを火そう場に運び、骨を拾ったとき、

「骨ってこんなに細いんだ」と思いました。今、ルンの骨は、仏だんでおじいちゃんおばあちゃんといっしょにいます。

私は対馬丸記念館の合唱団に入っています。記念館には昔の教科書やランドセル、対馬丸に乗って

帰って来られなかった子ども達やその家族、先生の写真がかざってあります。私と同じくらいの年の子ども達の骨は今も深い海にしばらくだま「助けて」と言ってる声が聞こえるようです。

私が住んでいるのは、沖縄島の一番南にある「ひかりとみどり」といのりのまち「糸満市」です。昔から、「海人の町」と言われていて、港ではハーレーという船をこぐきょうそうや、十五夜には大つな引きがあります。自然も豊かで、太陽の光がキラキラと青い海を照らし、畑には野菜や果物が実り、校庭の月桃は長い葉をしげらせ、白い花をさかせています。

七十六年前、二十四万人以上がなくなった沖縄戦がありました。糸満は、兵たいとにげまどう住民をまきこんだ一番のげき戦地となりました。だから糸満には戦争のいいひがあちこちにたくさんあります。

戦後、野ざらしにされていた「遺骨」三万五千柱を集めて作られたのが、魂魄の塔です。ここでこんなにもたくさんの方がなくなつたとは思えないくらい、今は静かにいのりをささげる場所です。ここであんな人々と、その遺骨をさがし

命のつながり

高嶺中学校3年

山城 万奈美さん



私が住んでいる沖縄本島南部の糸満市は、戦争で最後の激戦地となった場所です。激しい地上戦が起きた場所です。軍の人達だけでなく、罪のない多くの地元の人が犠牲となつてしまったそうです。私の祖父母はそんな沖縄戦の体験者です。私が幼い頃は、戦争について、口を閉ざしていた祖父。私が中学生になり、平和学習をするようになってから、祖父母は、様々な事を教えてくれました。

当時祖父母は十歳だったけれど、あの頃の記憶をはつきりと覚えていました。祖父は当時家に両親、祖父母、第二人と一緒に七人で暮らしていました。やがて戦争が始まると、屋敷の避難壕に家族で避難していききました。しかし馬を提供したり、屋敷を使わせたりしたそうです。日本軍に協力している家の家族は連隊本部壕の上にあつた壕を使つていいことになつたらしく、深い壕だったので、屋敷壕よりずっと安全だと思い、近くに住んでいた人と一緒に数十人が避難しました。私の祖父は、祖父母のために毎日家から二人の食料を運んでいました。しかし、いつもより飛行機の来襲が多かつたある日、突然壕へ弾が落ち、天井が崩れ落ちました。幸いにも祖父達は壕の奥にいたため助かつたのですが、祖父のすぐメートルほど前まで落着いていたのです。助けを求める声や悲鳴が聞こえる中、辺り一面真っ暗で、壕の中に祖父達は閉じ込められてしまいました。しかし真っ暗な闇の中、わずかな光を見つけ、必死に土を掘り返してどうにか外に出ることができたそうです。この時の落着で四十〜五十

人ほどの人が亡くなつたそうです。この話を聞いた時、私はぞつとしました。もしあとメートル前に祖父がいたらと思うとても恐ろしいです。その後祖父はアメリカ軍の捕虜になりました。収容所生活を送つたり、弾薬処理の作業をさせられたりしました。弾薬の処理中に怪我をする人も多く、私の祖父も一度目をやられてしまい、二週間もの間、目が開けられないことがあつたそうです。祖母も同じく、戦争が始まつた頃は、親戚の壕に避難していました。しかし、壕の近くに爆弾が落とされたり、壕の中にガスを入れられたりして、無理矢理壕の中から追い出されたり。その後軍の攻撃から逃れるために、島の壕を転々としている途中でアメリカ軍の捕虜となりました。

私の祖父母は、命からがら、今日まで生き延びてきています。祖父母がいるからこそ、父母がいて、私がいる。そう思うと、命のつながりの重さを痛感しました。祖父は今でも「どうしてあれだけの武力を持った、大きな国と戦争したのかと、今更ながら残念でならない。」二度とこのような戦争を起

求めている家族のなみだがしみこんでいます。しかし、この糸満の土が辺野古の米軍基地を作るためのうめ立てに使われようとしています。

遺骨を見たことがない人は、悲しい気持ちにならないかもしれません。だから二度、沖縄のこの景色を見てほしいです。七十六年前の遺骨は、まるで小石やサンゴのかけらのようにそこにあります。沖縄の海と島には、まだ数多くの遺骨がうまつていて、私達はまだ見つけられない遺骨の上で今を生きています。

遺骨が暗やみの中で光をあびられないなら、私達が希望の光になりたいです。戦争中、戦争の後、沖縄でどんな事があつたか、私はもっと知りたいし教えてほしいです。そしてまだ知らない人に伝えていきたいです。身近な生き物の命を大切に、沖縄のかけがえのない自然を守つていきたいです。それでも自分の生きる道が自分らしく歩めるような世界にしていきたいです。沖縄戦から学んだ「命どう宝」という希望の光が集まれば、世界中の平和のかけはしになれると私は思います。

こしてほしくない、それしか言えない。」と話してくれます。祖父の瞳の奥に込められた思いに私は涙が出てきました。祖父母は必死になつて生きてくれた。私の両親、そして私がいる。こんなにも豊かで、こんなにも幸せな毎日を過ごしている。「おじいちゃん、ありがとう。」そう言わずにはいられない。

現在、沖縄で問題になっている戦争体験者の減少により、戦争の話を直接聞くことができなくなつていきます。そこで私達が次の世代へ体験者の想いと声を届けていくことが、後に残された使命だと私は思います。祖父の言う通り、もう二度と戦争が起こらないように、沖縄戦を絶対に風化させないように、今を生きている私達に何ができるのか、何をすべきなのか、一人一人が考え行動すべきだと思います。

今の私にできること、それは、武力での戦は、決してやってはいけないと訴えること。祖父から痛ましい戦争の事実を正確に伝えること。そのために言葉を通し、言葉で伝える人になることです。世界中の人々の幸せと平和を願つて。